

# 大 月 遺 跡 II

ŌTSUKI SITE II

1992. 3

山梨県教育委員会



# 大 月 遺 跡 II

ŌTSUKI SITE II

# 序

本報告書は、昭和52年度山梨県立都留高等学校校舎改築工事に伴う発掘調査結果をまとめたものであります。

本遺跡での考古資料の最初の発見は、仁科義男「甲斐大月の先史遺跡に就て」によると明治34年に、現在同一場所に存在する都留高等学校の前身である旧制都留中学校当時に、考古資料特に土器の発見がなされたとあります。

次いで大正7年の中学校理科教室建設の際には広口甕の発見、昭和2年の、富士急行路線敷設に伴う発掘、さらに現在の校舎改築に伴う発掘調査に至るまで、考古資料が発見されております。

校舎改築工事は、先に昭和50年に調査がなされており、そこでは縄文住居址1軒と遺物の集中区1ヵ所、歴史時代住居址2軒が検出されております。

今回の調査も前回と同様に、校舎1棟分の範囲の中での調査であります。その結果は、歴史時代住居址2軒、溝1基、土壇1基が検出されました。住居址からは、相模方面からの影響をうけて製作されたと思われる甕形土器が発見されております。このことより、大月市を含めた山梨県東部地域は、隣接する相模国と密接な関係にあったものと考えられています。

本報告書が古代甲斐国の研究のうえでの資料として、多くの方々にご利用いただければ幸甚であります。

末筆ながら、ご協力を賜った関係機関各位、並びに直接調査に従事していただいた方々に厚く御礼申し上げます。

1992年 3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 磯 貝 正 義

# 例 言

1. 本報告書は、昭和52年度山梨県立都留高等学校校舎改築工事に伴う発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は山梨県教育委員会文化課が調査を担当し、昭和52年7月18日から8月8日まで行った。
3. 調査現場は、小林広和、里村晃一(平塚市立、金田小)が担当し、以下のものが発掘に従事した。

## 補助員

遠藤秀樹、細田俊也、菱山かつよ、中山誠二、小林和男、菊地健一、長谷川一正  
高橋央修、下山良明、桜井節子、内藤和久、岡村和子、遠藤和子、香川洋子、萩 剛二、  
守屋誠司、須藤茂雄、浜田清嵩

4. 本報告書の作成に伴う整理作業は以下の者が従事した。  
遺物整理は、  
伊場章一、塚原康徳、高橋央修が行い、遺物の実測は塚原康則、高橋央修が行った。  
遺構のトレースは里村が行った。
5. 本報告書の編集、執筆は小林広和、里村晃一が行った。
6. 使用地図は国土地理院5万分の1（都留）を利用している。水系レベルは海拔高を示す。
7. 出土遺物、報告書の図面類は山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。



# 目次

例言

第I章 調査に至る経過と調査経過 .....	1
1. 調査に至る経過 .....	1
2. 調査経過 .....	1
第II章 遺跡の位置と歴史環境 .....	2
1. 遺跡の位置 .....	2
2. 歴史環境 .....	3
第III章 調査結果 .....	5
遺構（住居、溝、土壌） .....	11
遺物 縄文時代、歴史時代 .....	12
まとめ .....	20

# 挿図目次

## 図版

第1図	大月遺跡位置図	3
第2図	大月遺跡全体図	6
第3図	大月遺跡地層図	7
第4図	大月遺跡第1号住居址実測図	8
第5図	大月遺跡第2号住居址実測図	9
第6図	大月遺跡第1、2号竈実測図	10
第7図	大月遺跡第1号溝実測図	11
第8図	大月遺跡第1号土壌実測図	12
第9図	大月遺跡遺構外出土土器	15
第10図	大月遺跡遺構外出土土器	16
第11図	大月遺跡遺構外出土土器	17
第12図	大月遺跡遺構外出土土器	18
第13図	大月遺跡第1号住居址出土土器	19
第14図	大月遺跡遺構配置図	20
第15図	山梨東部地域土器変遷図	22

# 図版目次

図版1	大月遺跡全影・土層	25
図版2	第1号住居址及び遺物出土状況	26
図版3	第1号住居址・竈	27
図版4	第2号住居址	28
図版5	第2号住居址・竈	29
図版6	出土遺物	30

# 第 I 章 調査に至る経過と調査経過

## 1. 調査に至る経過

本遺跡は、明治34年（1901）の校舎建築の際に考古遺物が発見されて以来、大月市内における遺跡として認識されてきた。さらに昭和2年（1927）の富士山麓電鉄工事の際には発掘調査が実施され、「大月遺跡」として発表され、県下でも著名な遺跡として知られるにいたった。

最近では昭和50年度に校舎改築工事に伴い発掘調査が行われており、縄文中期と奈良時代の集落の一部が確認されて、既に報告済みである。

今回の発掘の契機は、昭和52年の都留高等学校校舎改築事業が決定されたことによる。このため県教育委員会では大月遺跡の発掘調査計画を実施することを決定し、同年6月22日に発掘調査通知を提出した。

以上の経過を得て山梨県教育委員会が調査主体となり、昭和52年7月18日から8月8日にかけて実施した。

## 2. 調査経過

昭和52年

7月18日 現場到着 テント・機材置場等を設置、機材搬入

7月19日 発掘区を確認後、機械により表土剥ぎ作業

（調査区全体を50cm平均に削平し、同時に作業員により遺構確認精査を開始）

7月23日 前日迄の掘り下げ面では遺構確認が困難な為、機械によりさらに50cm程度掘り下げる。同時に削平面を作業員により精査し、遺構確認を進める。

7月26日 第1号住居址を、G-4、6で確認。精査を行いプラン確認調査を行う。その結果グリットGより南寄りに位置する事が判明し、拡張部Hを設け掘り下げ、1号住居址のプラン隅丸方形の全容を確認する。

7月27日 前日に引き続き、第1号住居址の掘り下げを開始する。これに並行してA調査区の北側に、B調査区を設け機械により表土剥ぎ作業を開始する。

7月28日 B地区の西北に土壌1基集石溝1基を確認。さらに東部よりに2号住居址を検出し精査後、プラン隅丸方形を確認する。

7月29日 集石溝、2号住居址の掘り下げを開始する。基本土層図実測作成。

8月2日 土壌の掘り下げを開始する。集石溝掘り下げ完了。実測開始。

8月4日 第1号住居址掘り下げ完了。ただちに実測を行う。

8月6日 土壌、2号住居址掘り下げ完了。実測開始。全体図測量。

8月8日 発掘作業終了



## 第II章 遺跡の位置と歴史環境

### 1. 遺跡の位置

大月遺跡は山梨県東部地域の、大月市二丁目11-20に所在する。山梨県東部地域とは、御坂山塊により甲府盆地と東西に2分された東側の地域を指し、JR中央線沿いに東に至れば東京都に、また市内を流れる桂川は下流で河川名を相模川と変え、相模湾に流れ込んでいるように関東に直接、接した地域である。

また、大月市は甲府盆地よりみれば、山梨県から東京方面、神奈川方面に抜ける山梨県東部地域の交通の要所に位置し、周辺地域のほぼ中央部を占める地理的要所となっている。

東部地域と盆地を遮断するように西部では2000m級の山々が北より鶏冠山1710m、大菩薩嶺2056m、黒岳1987m、滝子山1590m、鶴ヶ鳥屋1374m、三ッ峠山1786mと連なり御坂山塊を形成して富士山にいたる。

東部地域にいたっては高川山、九鬼山等の大小の山々が連綿と幾重にも連なり、東部の丹沢山地、北東部の奥多摩に接する。これらの山々の間を大小の河川が走りその大部分は桂川に流れ込んで途中で、多くの河岸段丘を形成している。

ここでの平坦部は桂川沿いに限られ、ほぼ東西方面にみとめられ、そこには富士山北麓の河口湖町、富士吉田市をはじめ、都留市、大月市、上野原町の山梨県東部の主たる市町村が位置する。

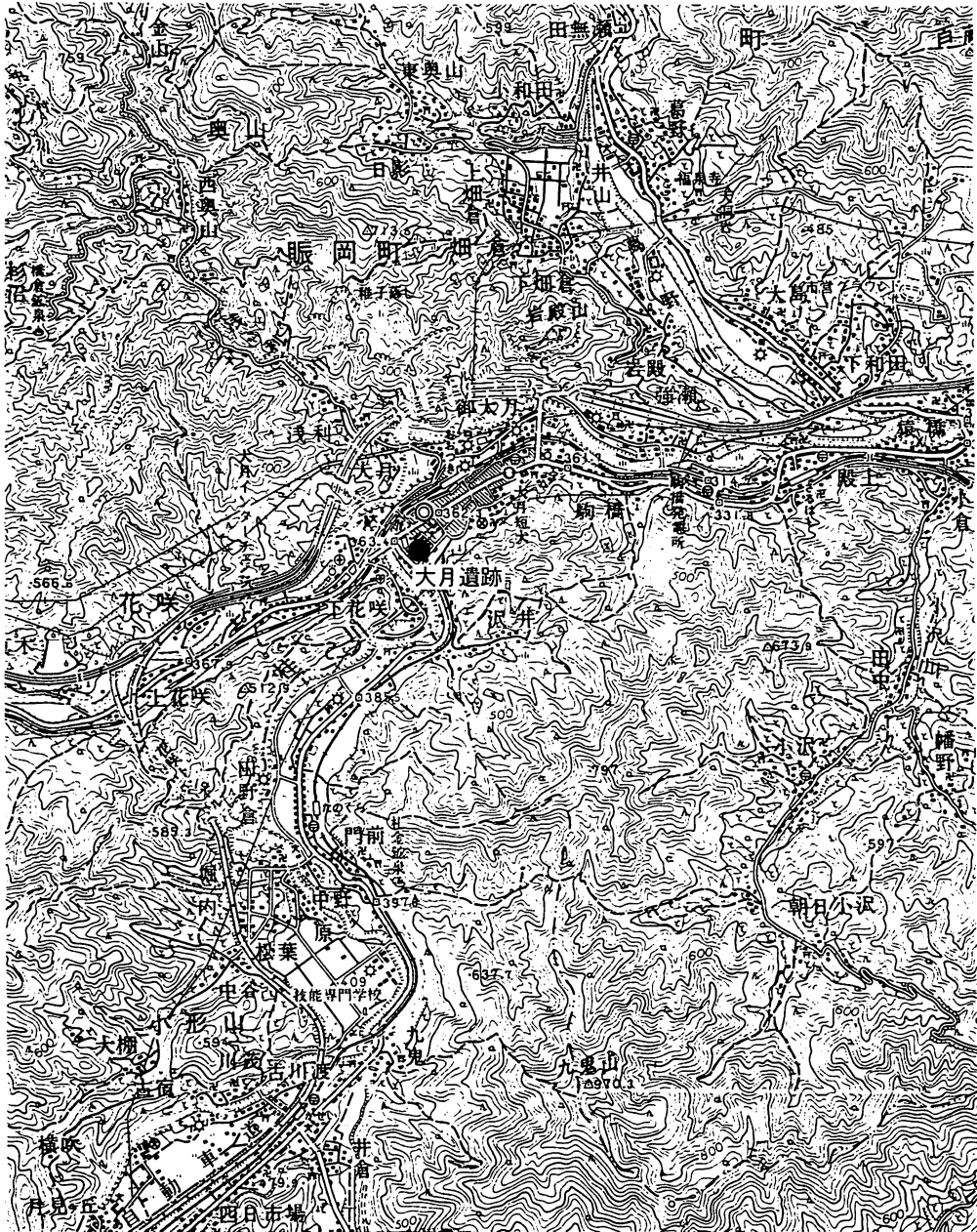
桂川の上流では大きく、2ヵ所の水源地に限定される。まず富士山北麓に源を発する河川は北流し、都留市市内を流れ、途中、大小の支流と合流しながら桂川上流部を形成する。

この兩岸には大小の河岸段丘が発達しており、その平坦部には縄文から歴史時代にいたる遺跡群が認められる。一方、摺針峠に源を発する笹子川は、大月市笹子町、初狩町を西より東方向に流れる。この両河川は同市大月地内に入り合流して、桂川はさらに水嵩を増し規模が増大し東流する。このため合流地点付近ではY字状となり流れは東西方向に認められる。

この付近の桂川南岸の標高365mを数える河岸段丘上に遺跡が位置して、桂川との比高は30m前後を測る。遺跡の属する地域は西に高川山(975m)、南に九鬼山(970m)北に岩殿山、東に百蔵山(1003m)の1000m級の山々に囲まれた典型的な山間部であり、その中央を桂川が東西方向にながれて山裾を侵食して河岸段丘を形成している。桂川の北岸では岩殿山を始めとする北部山地は、丹波山地より伸びた急斜な山が迫っており、桂川の侵食により断崖となり、さらに平坦部は南岸に比較すると極端に少なくなっている。南岸では高川山、九鬼山の970m級が至近距離にあり、その存在は特に目立ち、山間部空間の南方への広がりや妨げている。このうち、九鬼山よりなだらかに張り出した遺跡の乗る北斜面は、合流地点手前の北流する桂川と、九鬼山に源を発し九鬼山東部を削るように北流して桂川に合流する小沢川とに東西を挟まれる。さらに斜面先端の北部は桂川により侵食を受け河岸段丘が形成される。

この河岸段丘は幅0.5km前後、長さ1.3kmで周辺地域では最大規模の平坦面を有しており、現

代ではその平坦部の大部分は市街化されている。遺跡は大月市市街地の西端部に存在しており、遺跡のすぐ北側には国道20号線が東西方向に伸びる。



第1図 大月遺跡位置図 (2500分の1)

## 2. 歴史環境

桂川上流域の河岸段丘上は、山梨県東部地域では調査が進んでいる地域であり、研究者の関心も高く多くの遺跡が知られている。近年では中央自動車道の通過に伴う発掘調査、さらに、

その他開発等により、牛石遺跡を初めとする多くの遺跡、資料が集積されている。また、今回の大月遺跡のような校舎改築、建設に伴う小規模な調査も各地で行われるようになっており、さらには分布調査の充実とあいまって遺跡の分布密度は高くなり、平坦面や緩斜面は全域に遺跡が認められるようになってきている。そのため、地域全体の概要を把握したり、時代別に遺跡群の展開を概観することも可能となってきた。

旧石器時代では、桂川上流部の支流である菅野川で一杯窪遺跡が1ヵ所認められている。そこでの火山灰層の観察からは、A T層と遺物包含層との間には22枚以上もの降下火山灰層が認められており、遺物包含層は立川ローム基盤若しくは一部は武蔵野ロームに食い込む層位であることが判明した。その年代もカーボン測定の結果からは、Gak-1<31870年の年代結果が示され、後期旧石器時代初頭に位置付けられた。その石器組成は、日本の旧石器群に特徴的なナイフ形石器を含まず、石器群中に打製石斧を保有しているのが特長である。石材は地元のガラス質凝灰岩が99%を占めており、その使用分布は山梨県では僅かであるが、多くは神奈川県相模野平野の旧石器群中に普遍的に認められる。

縄文時代では、調査報告が提出された遺跡が多くなり、集落址を始め宗教色彩をおびる祭址も発見され内容も充実してさらに複雑なものになる。縄文早期では、中央自動車道の建設に伴い笹子川支流の沢中原遺跡が調査され、そこからは押型文土器が検出され、胎土中には黒鉛が含まれる例が認められ注目された。早期終末の条痕文系土器群は大月遺跡の位置する合流点より上流の桂川支流沿に美通遺跡、古屋敷遺跡が認められている。

縄文前期になると遺跡は増大するが、西畑、神出、松葉、市久保、大棚、美通遺跡と小規模な発見ながら、普遍的に認められる一方、型式毎に細分してみると諸磯C式に集中する傾向を示し前期全般での、資料不足は否定できない。縄文中期では、遺跡数も増大するがその内容は充実しており、遺跡の展開、変遷も窺える調査も小敷ではあるが認められ、さらに祭祀遺跡と考えられる例の出土もある。縄文後期、晩期では遺跡数は減少するが確実に遺跡の存在は確認されている。特に中谷遺跡では配石遺構をはじめ、住居址等の遺構が確認されており、遺物では清水天王山式土器が多数発見されており、その後の研究の進展からは山梨県東部地域が中心的地域を占めることが明らかとなっている。

弥生、古墳、歴史時代では遺跡調査を進行の遅れに起因して発見例がすくなくなる。弥生では鶺鴒の島と生出山遺跡とが認められるが極端に少なくなるが、鶺鴒の島では県内で希な、遠賀川系統の破片群が認められる。古墳、歴史関係遺跡では調査規模は小さいが、河岸段丘上の平坦部には普遍的に認められる。本遺跡北東5kmの地点には、横穴石室を有する6世紀最終末から7世紀代の築造と考えられる子の神古墳が現存する。石室からの観察では胴張の発達した構造で奥壁は1枚石を使用するが東壁と奥壁に接する東壁部分に斜めに接している。また両壁の構築技術は、甲府盆地での例とは異なり東部地域の石室導入は、相模地方との関連性を考える必要性があろう。以上のように、桂川上流の遺跡の概観をしてきたが、地理的には甲府盆地よりも関東、駿河地方に近く、従って発見される遺物群や分布のありかたからは、これら近隣地域の影響をうけた痕跡を多く残している。



## 第Ⅲ章 調査結果

### 遺構

今回の調査で確認された遺構は平安住居址2軒、溝、土壙が各1基ずつである(第3図)。調査面積の1100㎡の中に占める遺構の割合は極めて低く、縄文時代にいたっては遺物(土器片)のみが検出されたにとどまった。

#### 第1号住居址(第4図)

調査区のGrid3~5-F~H内におさまる。周辺に遺構は認められず北西6mにはなれた地点に第1号溝が検出される。主軸方位はN-26°-Eをとり、平面形は長方形を呈し、規模は2.5×3.5mを測る。第V層を除去後、ハード・ルーム面でプランが確認され、ハード・ルーム面を掘込んでいる状況が把握される。

床面は地山ハード・ルームをそのまま利用している。EPa-bでは床面はほぼ平均に掘られて、平坦で固くしめるが、EPc-dでは、c側の竈方向に5°傾いているのが把握される。

壁は垂直直みに立ち上がるが、中には110°傾く箇所も認められ一定ではない。壁高は20~28cmである。竈は1基検出されている。周溝は竈付近を除きほぼ全周する。幅は5~18cm、深さは、15~27cmと深浅があるがほぼ平坦で一定している。東隅には貯蔵穴P1があり台形状を呈し28×33cmを測る。深さは7cm前後である。

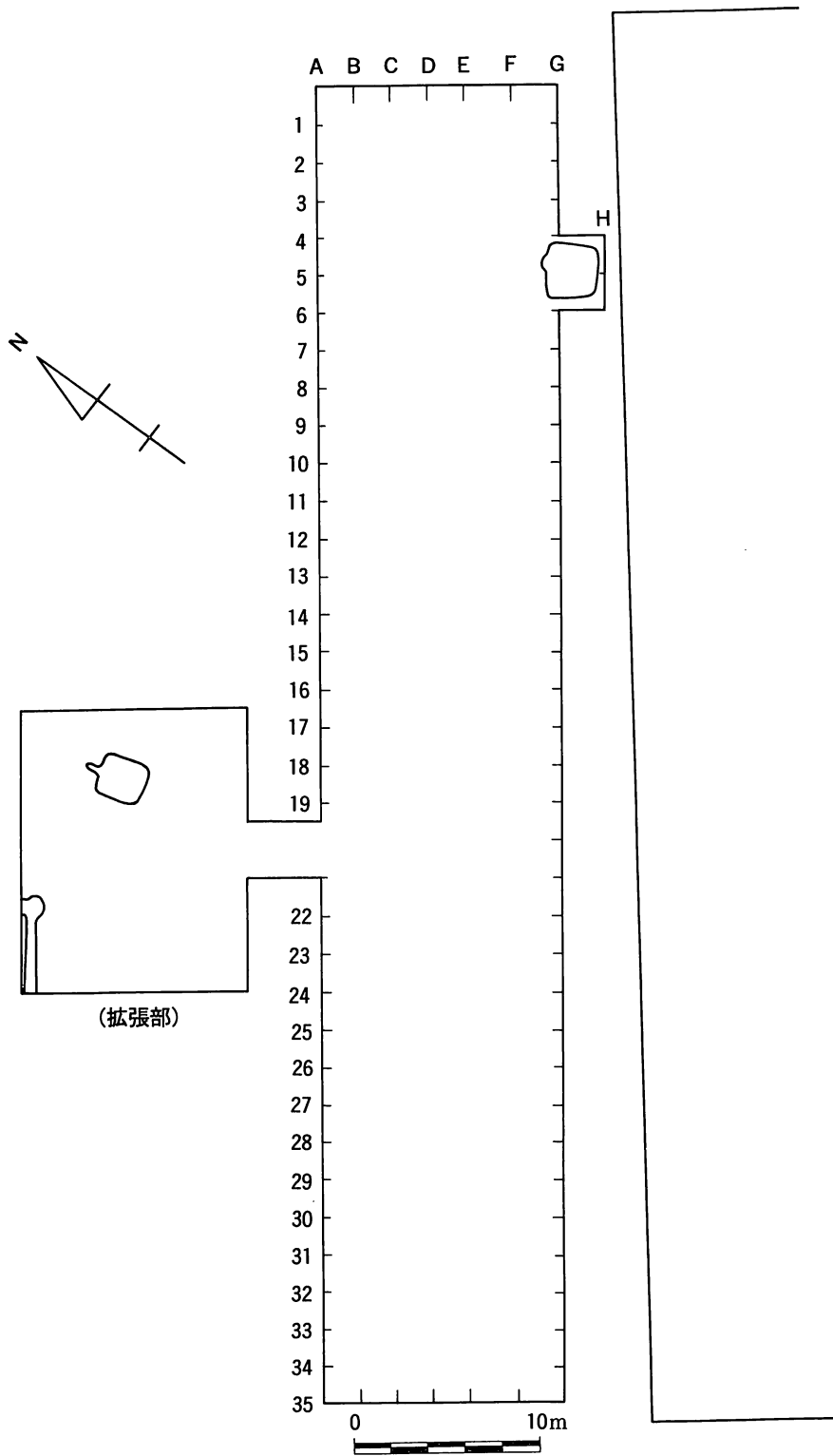
出土遺物は床面中央より南壁よりで1個体分の甕が押し潰されたように検出されている。出土レベルは床面より10cm前後浮上する。

竈は、北壁中央に構築されている。主軸方位はN-26°-Eをとり、規模は長さ70cm、幅95cmを測る。袖は粘土で作られ右袖下部には扁平な石材が2枚敷かれている。焚口部、燃焼部とも掘り込みはわずかであるが、袖部下位では両端にPit状の掘り込みが認められる。煙道部は30°の角度で立ち上がるが、煙道の確認はされない。焼土は、3~4層にブロック状に認められるが層は形成しない。出土遺物は、竈中央部より一個体分と住居床面上からやはり一個体分の甕が出土している。

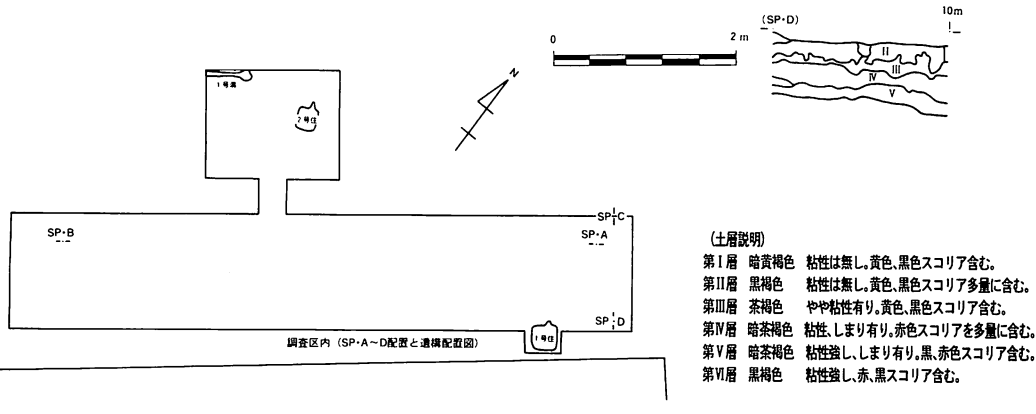
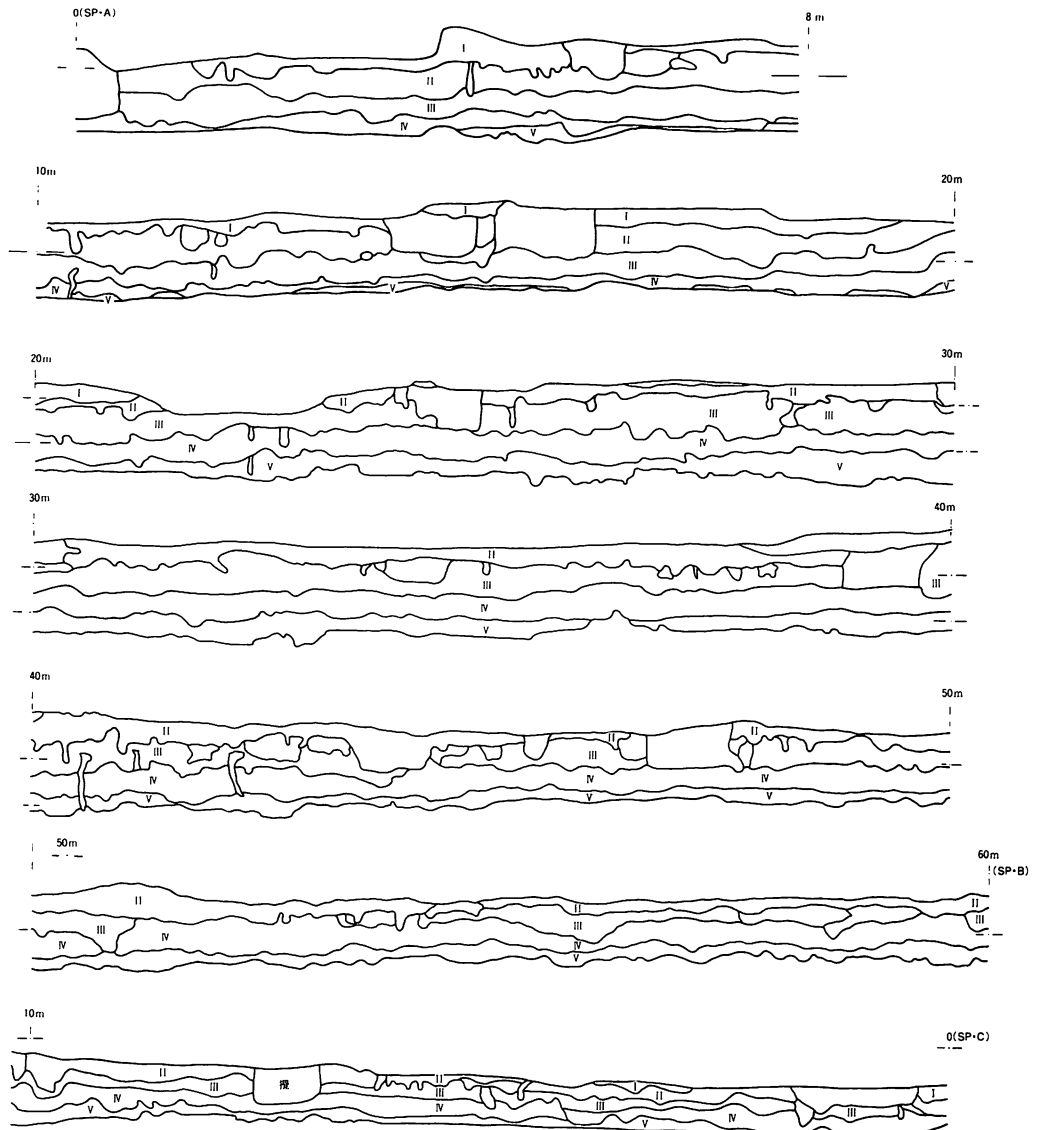
#### 第2号住居址(第5図)

調査区のGrid3~5-F~H内におさまる。第1号住居址の北東34m、1号溝の南7.5mの地点に存在する。主軸方位はN-18°-Wをとり、平面形は長方形を呈し、規模は2.8×2.95mを測る。第V層を除去後、ハード・ルーム面でプランが確認され、ハード・ルーム面を掘込んでいる状況が把握される。掘り込みは中央部より南壁付近がやや深く掘削され、凸凹が激しい。床面は良好な貼り床で北部が低く、南部がやや高くなっているが、ほぼ平坦である。

壁は垂直に近い状態で立ち上がる箇所や、緩やかな立ち上がりを示し一定でない。このことは、床面からの壁高が10cm前後と浅く保存が良好とは言えないことに起因するものと考えられる。竈は1基検出されている。北壁中央やや東よりに構築されている。主軸方位はN-13°-Eをとり、規模は長さ85cm、幅145cmを測る。袖は粘土でつくられる。焚口部、燃焼部の掘り込みは僅かであり不整形である。燃焼部での遺物は検出されていないが、袖下部で左右非対称に、直径10cm前後の小Pitが検出される。煙道部は20°の角度で短く立ち上り、底部は平坦でなく凸凹状をなし、100°と緩やかに立ち上がる。規模は、幅20cm、長さ100cmを計測する。断面での観察からは焼土は少なく横断面IV層に僅かに認められ、縦断面では燃焼部奥部から煙道部底部にかけて焼土が認められる。周溝は掘られない。

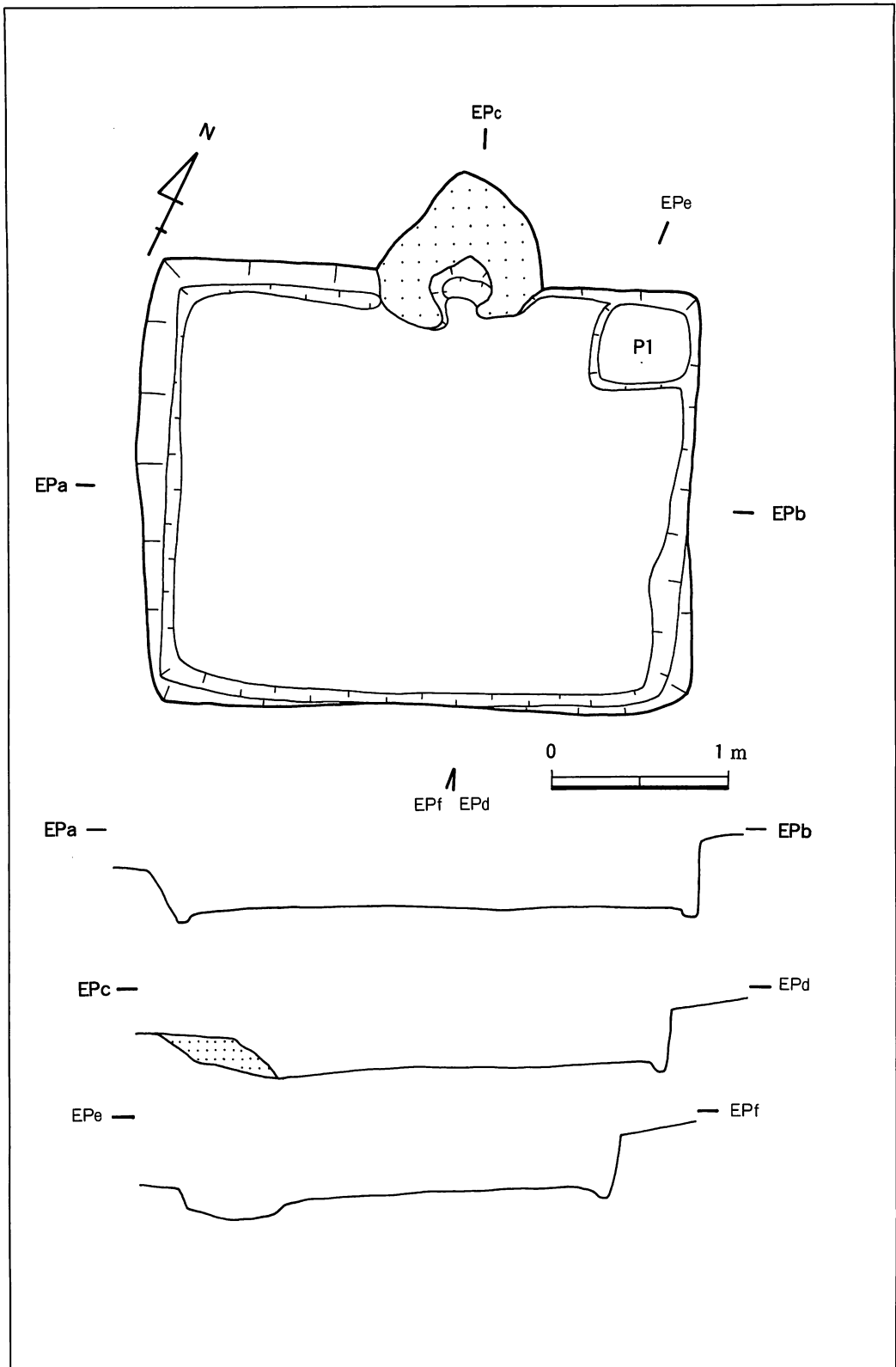


第 2 図 大月遺跡全体図

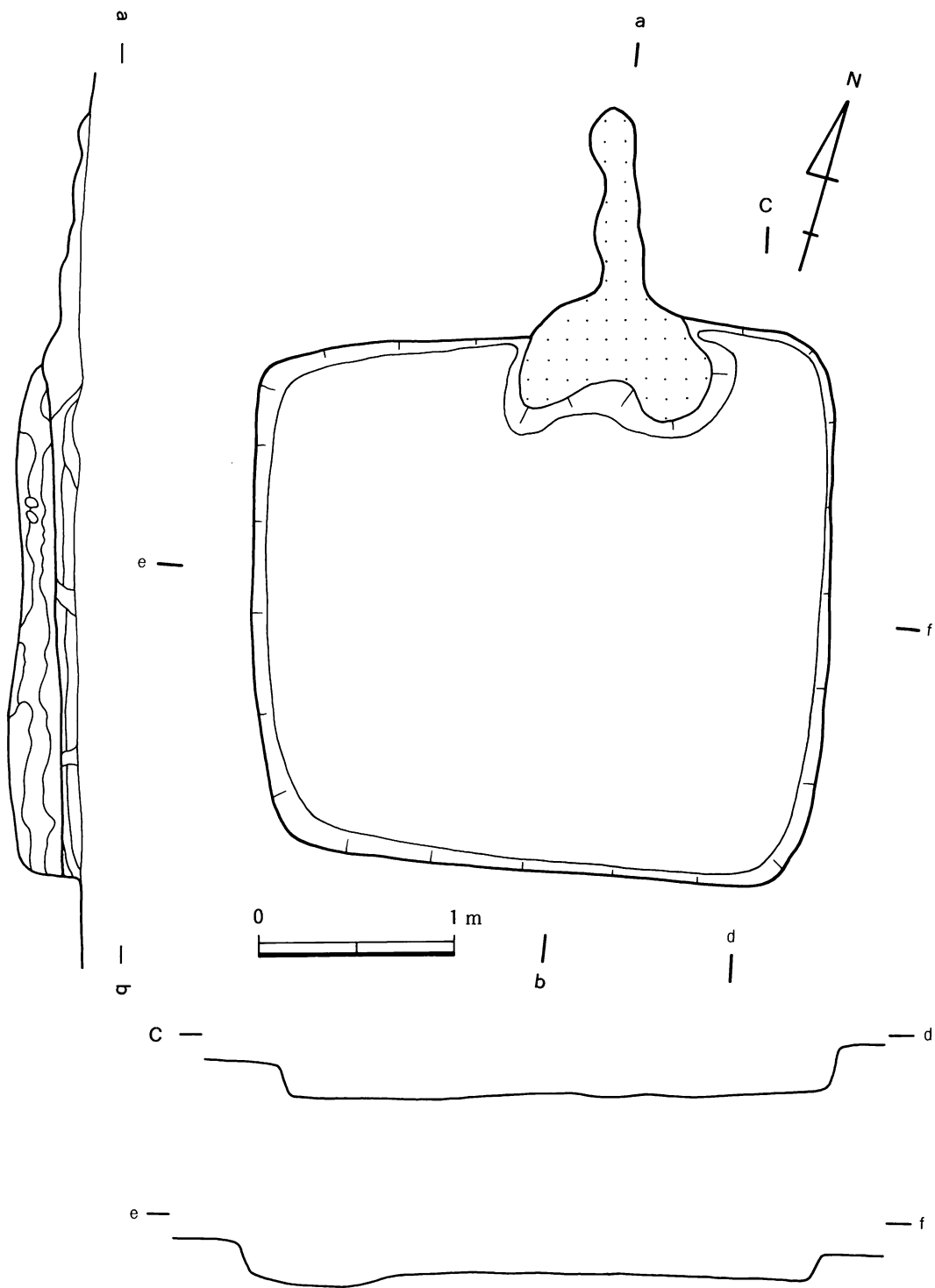


第3図 大月遺跡地層図

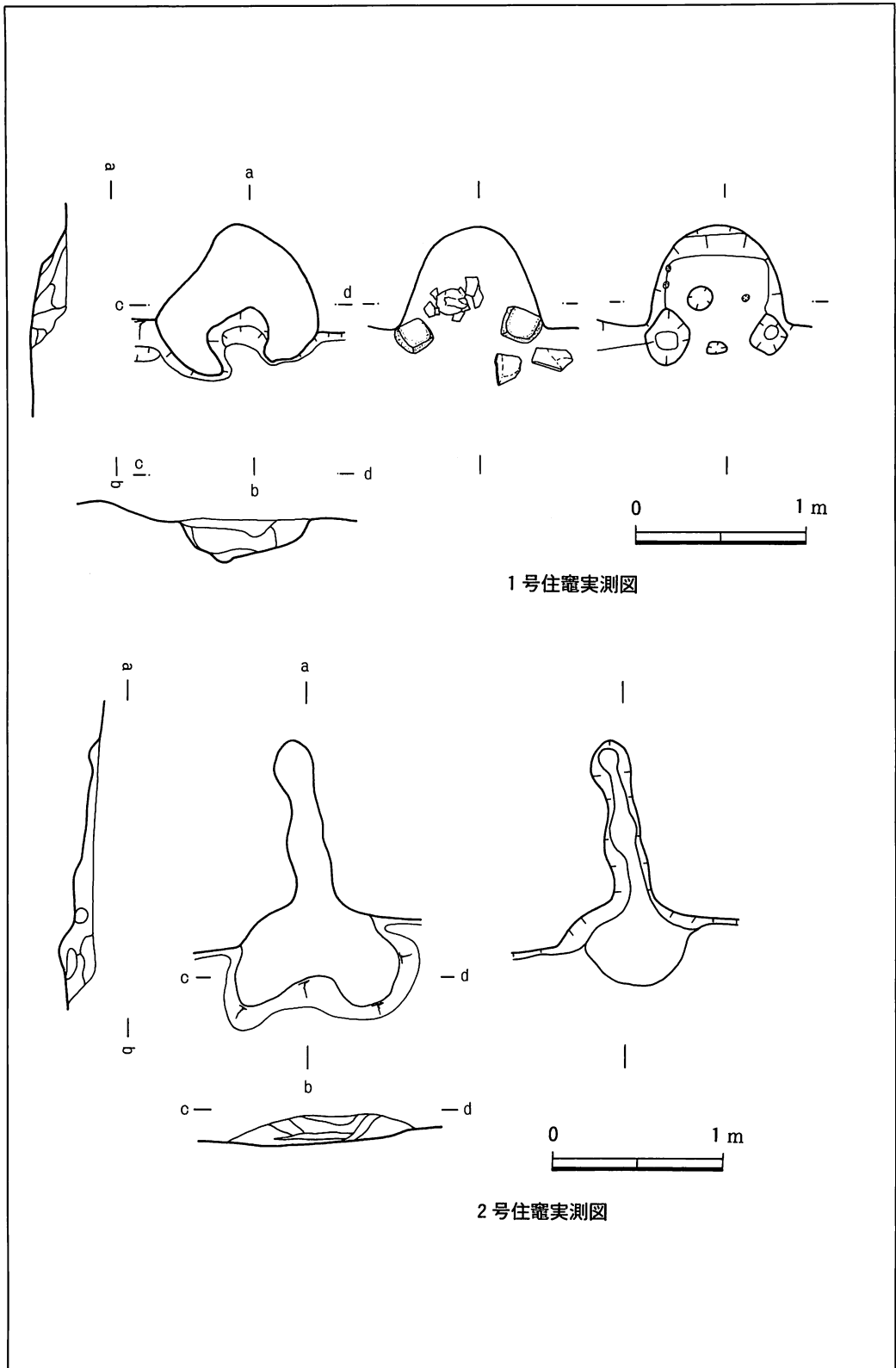




第4図 大月遺跡第1号住居址



第5图 大月遺跡第2号住居址



第6图 大月遺跡1、2号住、竈実測図



出土遺物は、本住居址に伴うものは皆無である。

## その他、遺構

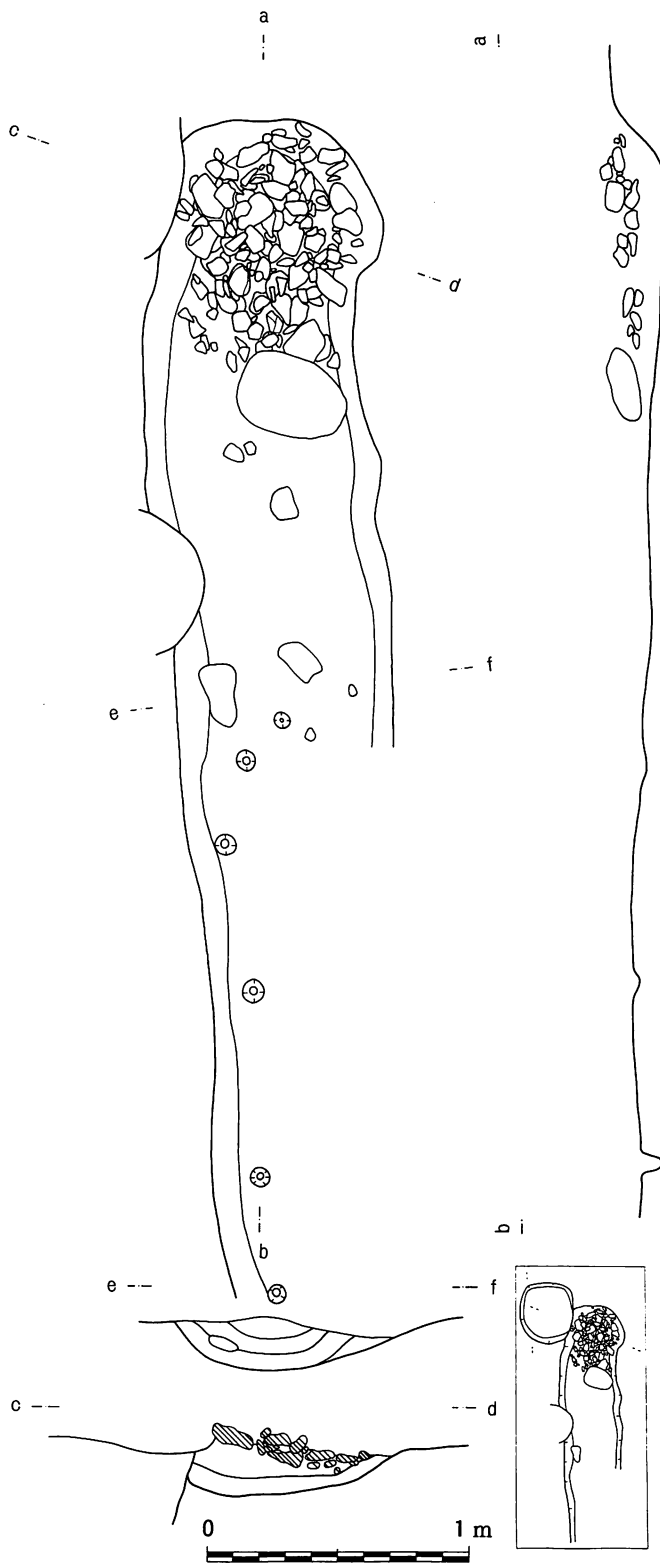
### 第1号溝（第7図）

発掘区B地点の西北隅に検出される。確認面は、第IV層除去後のハード・ローム面である。溝の起点は発掘区北壁中央よりやや西よりに存在する。溝断面は浅い皿状を呈しており、堆積状況は溝底に対応するようにレンズ状に近い状態である。溝起点より2.4mより、直径10cm程度の小Pitが約80cm間隔で4本溝左側に認められる。この付近では溝右壁は攪乱の為消失しており、Pitの確認等には至らない。また、溝起点部では人頭大の河原石を主体とする集石が認められる。集石範囲は溝内に納まり幅80cm、長さ120cmの長円形となり、起点の反対側には巾30cm、長さ40cm、厚さ10cmの大型石材が認められる。また、出土状況は溝底より10~30cm程度浮上している。

溝の規模は幅1m、深さ0.4mである。出土遺物はまったくなく、時期決定の資料を欠く。

### 土壌（第8図）

1号溝の東端部北側で重複する。確認面はやはり1号溝と同様のハードローム面である。1号溝を土壌が破壊する形をとるため、前後関係は1号溝が古く、



第7図 大月遺跡1号溝実測図

土壌が新しいという関係となる。南北に長軸1.76m短軸1.56mをとる。上面形態は北、東部で隅丸状を呈し、他は円形となり、底部の形態もそれに対応する。土壌底部は平坦で、塹壁は直立して、深さは最大0.86mを計測する。底部西側では、3個の小Pitが認められる。堆積土は、第1層黒色土（粘性弱く、赤色スコリアを含む）。第2層暗茶褐色（粘性やや強、黄色、赤色スコリア含む）。第3層茶褐色（粘性強く）出土遺物は全くなく、時期決定の資料を欠く。

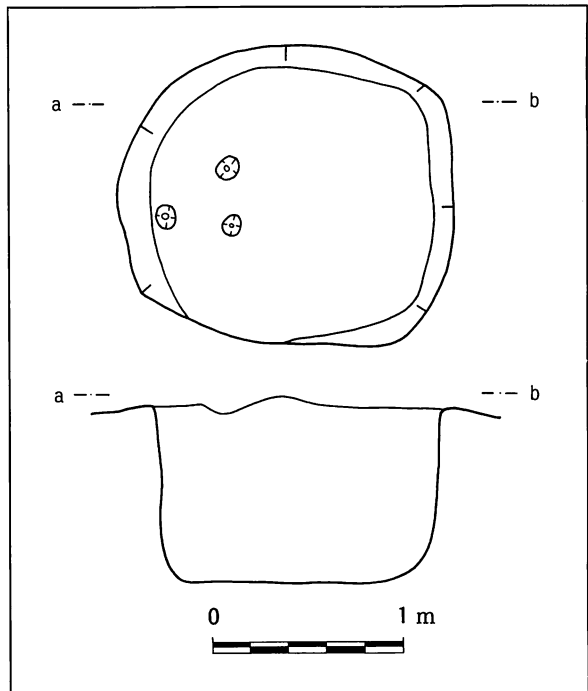
## 遺物

### 縄文土器（第9、10、11、12図）

先にも記したが、今回の調査で得られた資料は遺構に伴って出土したものでなく、多くは表土剥ぎ作業、あるいは遺構確認作業時に伴って検出されたものであり、土器破片が大部分であり、時期的には中期中葉から後期前葉に限定される。

### 中期後半（第9図～第12図）

第9図1～2は口縁部に半円連続区画を有している。1は地文に縄文RLを施し、粘土紐を貼り付け、2は沈線文により区画を施し、内区には集合線が充填する。1は曾利II期、2は曾利III期に属する。3、4は半円連続区画文の端部に裝飾される渦巻き文である。4は口唇部裝飾である。2同様の曾III期に属する。重弧文は2点、破片が検出されている（5、6）。7～34には地文に縄文を施すものをまとめた。9は縄文RLを縦位に施した後、同一原体を斜位に施す。口縁部には二条の粘土紐を並行に粘貼し、口縁内部にも一条の粘土紐を貼る。13は口縁内部にも一条の粘土紐を貼る。13は口縁部と胴部との接合部（縊部）に、粘土紐による横位の波状文とそれに直行する懸垂文が施され、胴部では縄文RLが施される。曾利II、III期に並行する。17は縊部破片である。地文には、撚糸文RLが認められ、さらに同一原体を懸垂状に押圧している。曾利II期に比定できる。11、12はキャリパー形土器に復元可能であり、今回の調査では最大の土器片である。器面全面に縄文RLが施文される。曾利IIIからIV期にかけて認められる器種である。18～21、25、26、28は地文縄文に直線状の沈線を配したものである。20は一条の沈線に並行区画され縄文RLが充填される。沈線の外区では摩消縄文となる。曾利IV期に比定できる。35～45は縊部から胴部にかけての破片であり、胴部に集合沈線が施されるものをまとめた。いずれも曾利IIからIII期に該当するものと考えられる。35～37は胴部から縊部にか



第8図 第1号土壌実測図

けての破片であり粘土紐貼付けによる施文法である。35は地文に集合沈線を施した後、折り返し懸垂文が粘貼される。丁寧な波状文が残る。36、37は縊部破片であり、直線と波状文による組み合わせである。39は、縊部から胴部上半にかけての破片で、縊部には隆線による横位の方形文が施文され、それ以下では細かい集合沈線となる。40は大型甕の胴部破片で3本の隆線による曲線が認められる。43は集合沈線文を施した後、同一施文具により並行沈線が波状に懸垂する。曾利Ⅲ期に認められるモチーフである。46、47、49～52は地文に条線を施さずに渦巻文もしくは曲線文が隆線により認められるもので、曾利ⅡからⅣ期にかけて多用される文様である。51、52は大型土器の胴部破片で地文に列点文が充填されており、曾利ⅢからⅣにかけて認められる。48は箆目条文の口縁部の一部である。53から55は地文に撚糸が施されるので関東の影響も少なからず受けている一群である。53は粘土紐により区画が施されている。54は3条の押引による隆線が曲線状に認められる。

56、57は地文に細条線を施したもので、56は口縁部に二条の平行沈線が施され、それ以下ではやはり沈線による蛇行状の懸垂文が認められる。57は、口縁部に平行細条線を施し、それ以下では同一施文具により縦位の細条線が施される。58、59は口縁部に二条の平行沈線とそれから垂下する沈線により区画が施され、中には八字状文が充填される。66は58に近い口縁部をもつ器形の胴部破片であり、いずれも曾利Ⅴ期に並行する。62、63は口縁部に微隆起線により区画がなされ、内区には縄文が充填される。中期末葉に位置付けられる。

69～77は後期初頭から前葉に位置付けられる一群をまとめた。69は波状口縁をなし、口縁には平行沈線を巡らせ波状の頭部では小円孔を有する。また沈線下位に沿って小円孔が連続に配される。70は微隆起に円形の刻目が、74は刻目隆帯が特徴的である。堀之内期に比定される。71から73は地文縄文に沈線を施したものである。71、72は1本の沈線による曲線と磨消縄文の手法が認められる。73は平行沈線による蛇行状文が認められる。75では磨消縄文の手法が認められ、平行直線と曲線の内に縄文LRが充填されている。後期初頭の称名寺期に並行するものとする。77は無文地に平行沈線、曲線等が施されており、堀之内期に並行するものとする。

#### 歴史時代、土器（第13図）

今回の調査では、1号住居より2点の甕形土器が発見されている。1は甕形土器である。出土位置は床面に接して1個体分が圧し潰されて検出された。保存状態は胴部では残るが、口縁部の3/4が欠損しており、実測図は、反転して作図してある。

色調は内外面ともに赤褐色を呈する。法量は口径26.7cm、高さ23.3cm、底径8.3cmで口縁部より12cmで胴部最大径27.8cmを計測する。プロポーシオンは、肩部が口縁より12cmの箇所位置して、そこより縊れ部に至り極端に外反する。胴部では緩やかな曲線で胴中位まで至り、それ以下では極端にしまり、長胴甕と胴張甕との中間形態を示す。

整形技法の観察は摩滅が進んでおり、観察をやや困難なものとしている。体部外面では下位から上位方向に縦位篋削りが行われた後、撫でによる調整が施される。特に底部に接する最下部では先の篋調整→撫で調整後、さらに粗い篋調整を施している。縊れ部から口縁部にかけては横位の撫で調整が認められ小型甕と製作技法を同じくする。内面では、刷毛調整後、丁寧

な撫で調整が施されており刷毛目は胴下半部に僅かに残る程度である。

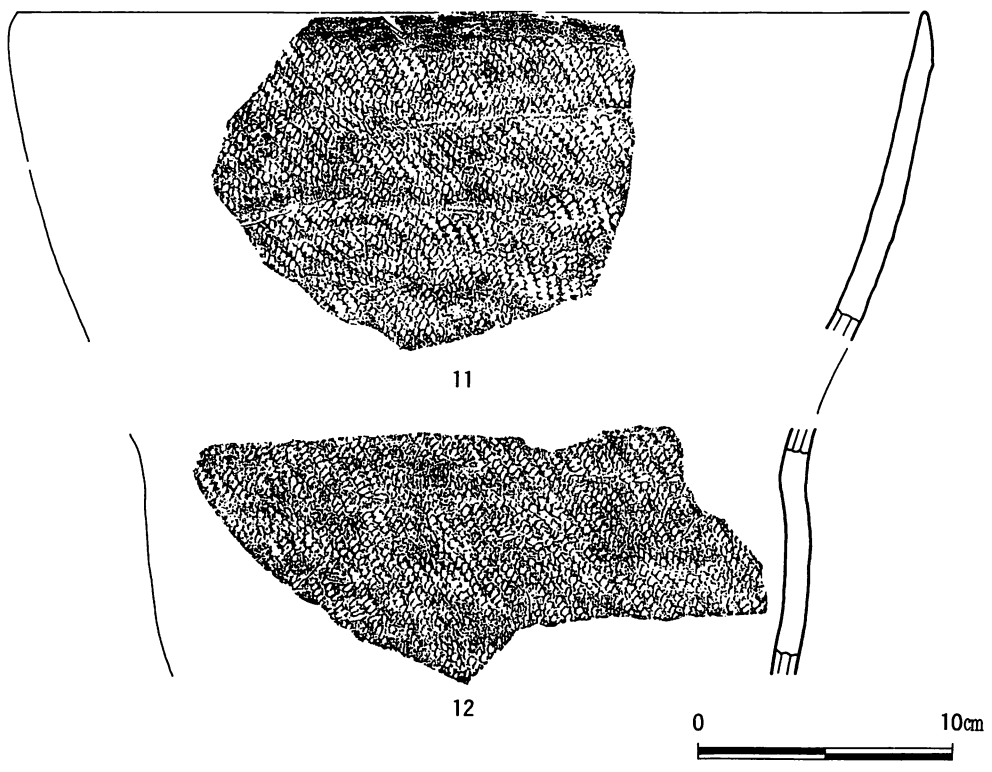
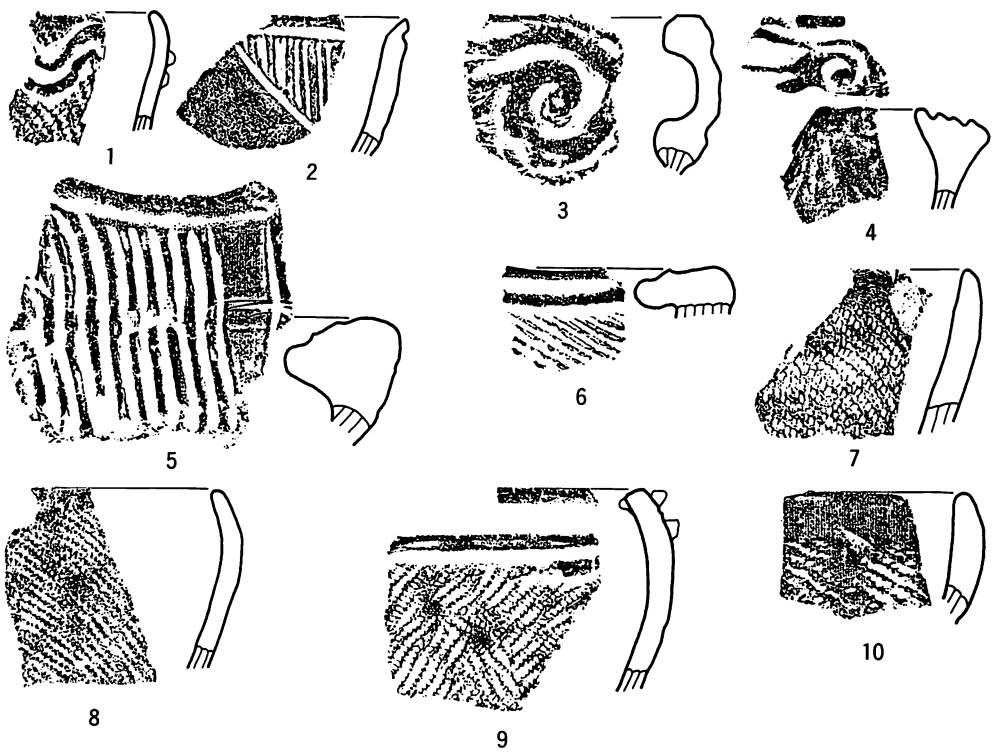
胎土は1mmから3mm大の小石を多量に含む。甕体部全体がザラザラした感があるのは整形によるものでなく、胎土によるものと考える。

2は小型甕である。出土位置は1号竈内の燃焼部中央よりで認められた。器面の大部分は2次焼成を受けている。保存状態は口縁部は1周するが、胴部では1/4が欠損する。色調は外側でうすい茶色を基調として暗グレーの斑を呈する。内面は黒に近いグレーを呈する。

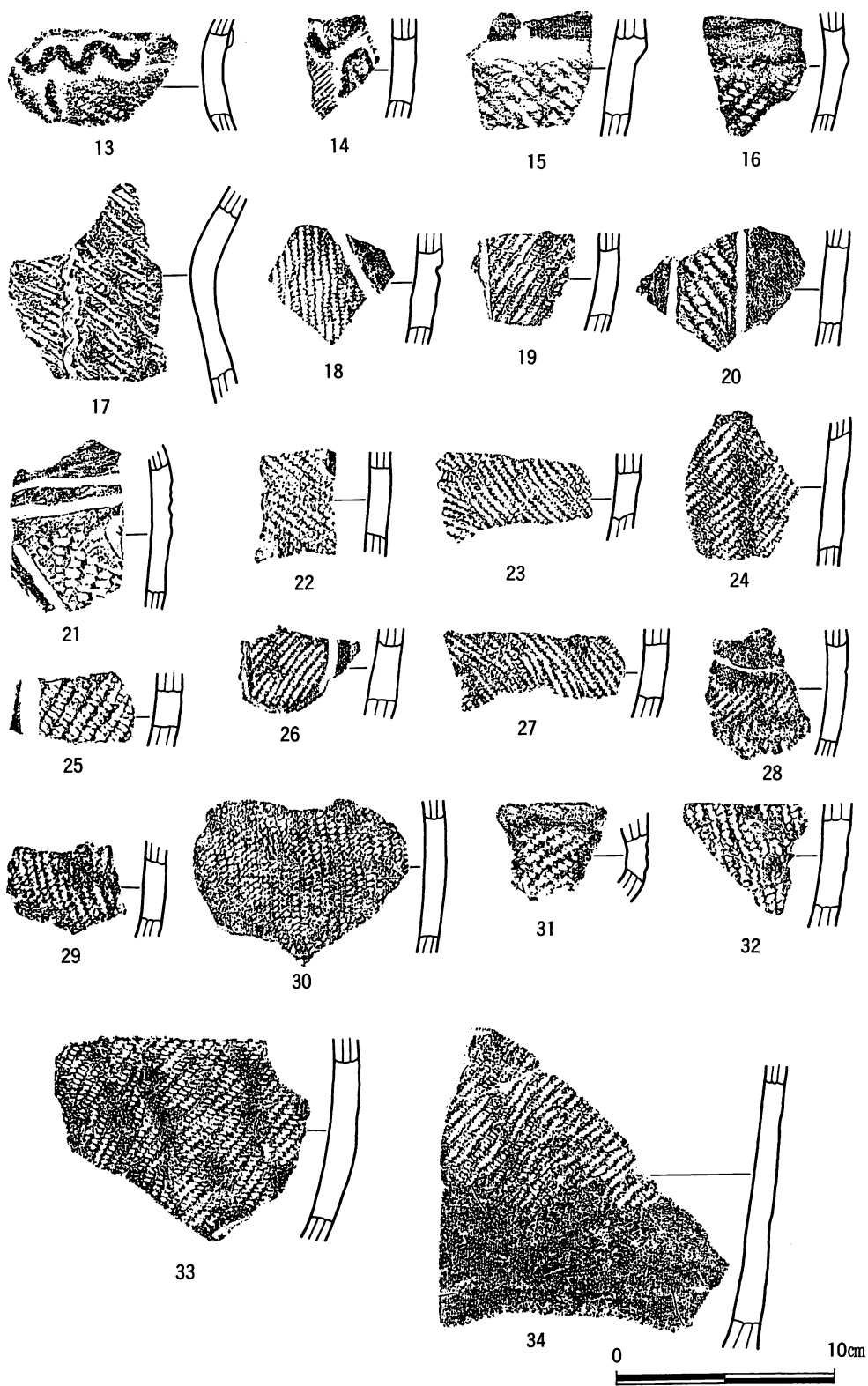
法量は、口径17.4cm、高さ16.7cm、底径6.9cmである。口縁部より下位5.6cmで、胴部最大径16.7cmを計測することから、口縁が最大値を示す。プロポーションは肩部が口縁部から5.6cmの位置のところにあり、そこより僅かに内湾しながら緩やかな曲線を描き縊れ口縁に至る。全体的に寸詰まりの傾向にあり、やや胴張甕に近い形態といえる。

整形技法の観察は二次焼成が加えられる為やや観察困難なものとしている。体部で、下位から上位へ縦方向に筥削りを行った後、丁寧な撫でによる調整を加える。縊れ部より口縁部にかけては横位の撫で調整が認められる。底部には木葉痕が認められる。

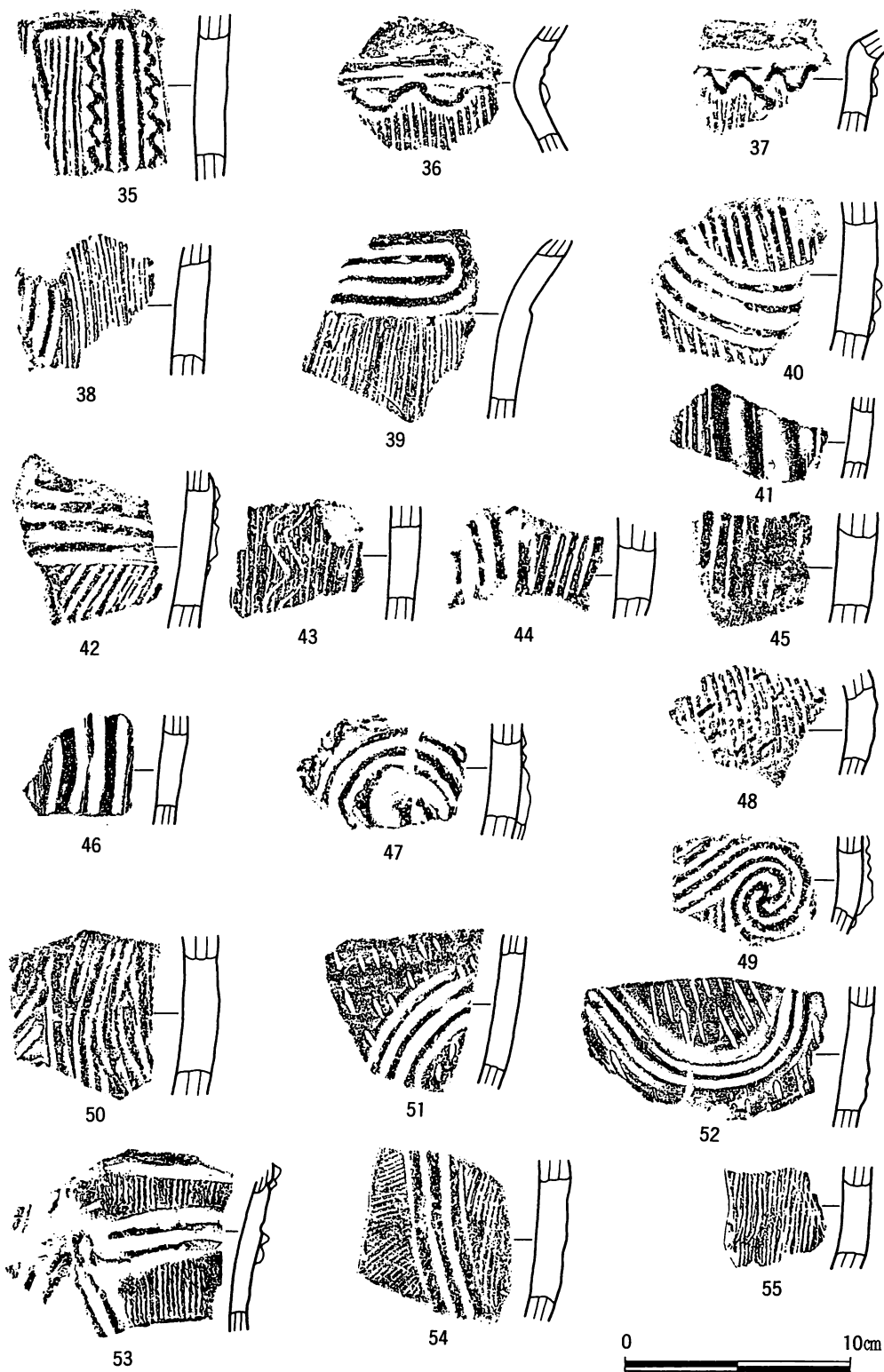
胎土は、1～2mmの砂を混ぜており粗く、ザラザラしている。



第9圖 大月遺跡遺構外出土土器

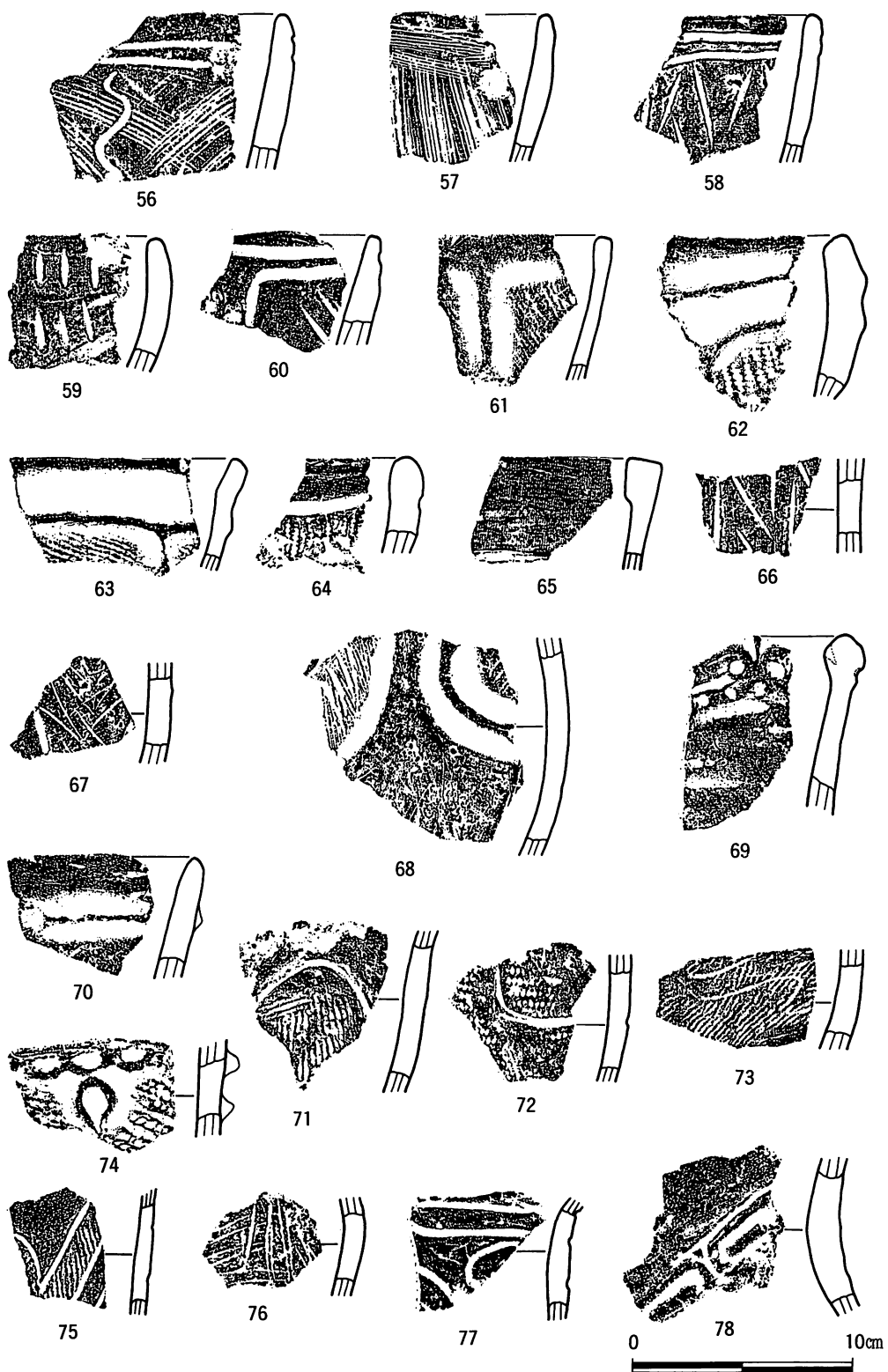


第10図 大月遺跡遺構外出土土器

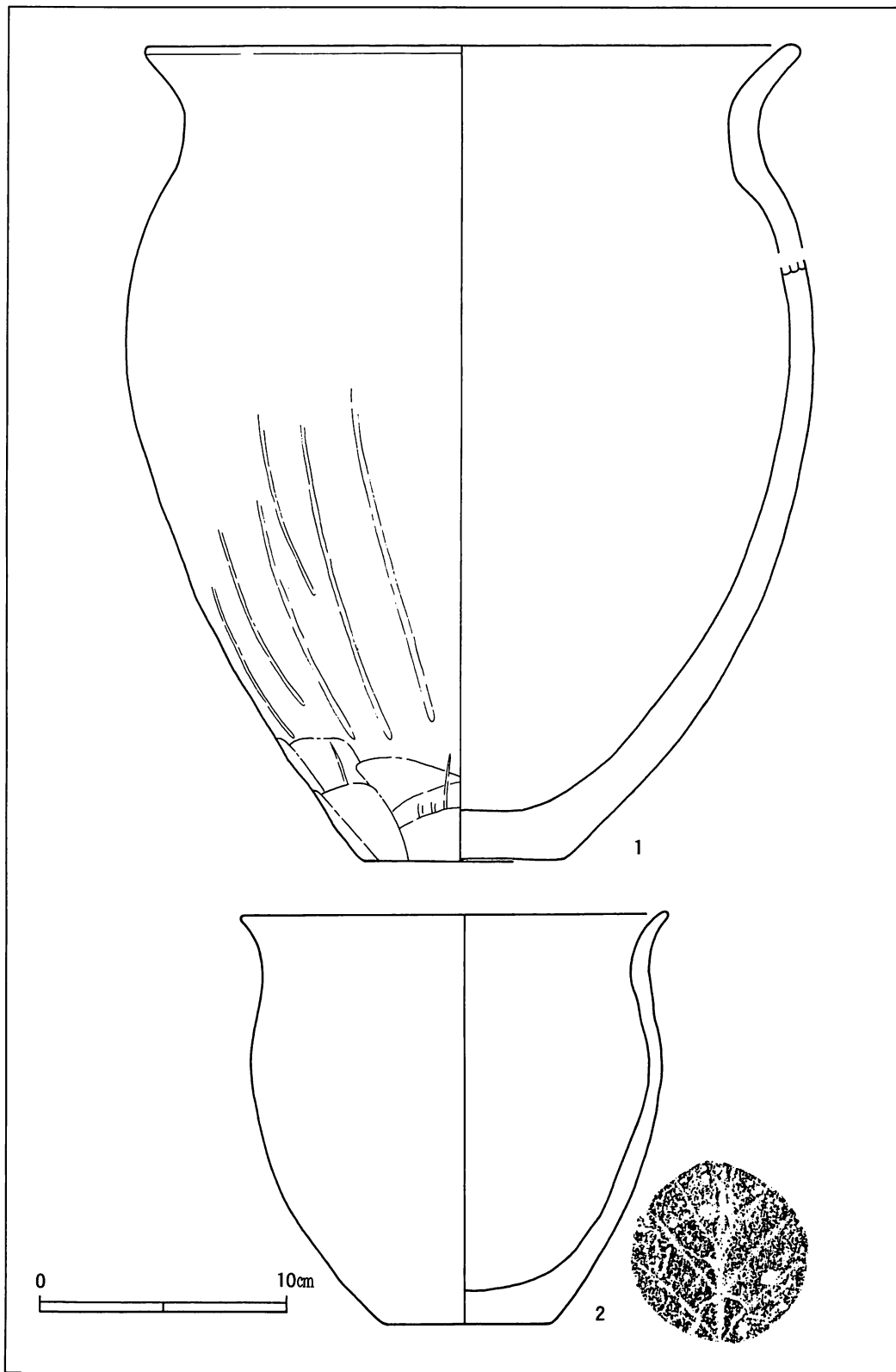


第11圖 大月遺跡遺構外出土土器





第12圖 大月遺跡遺構外出土土器



第13図 大月遺跡1号住居址出土土器

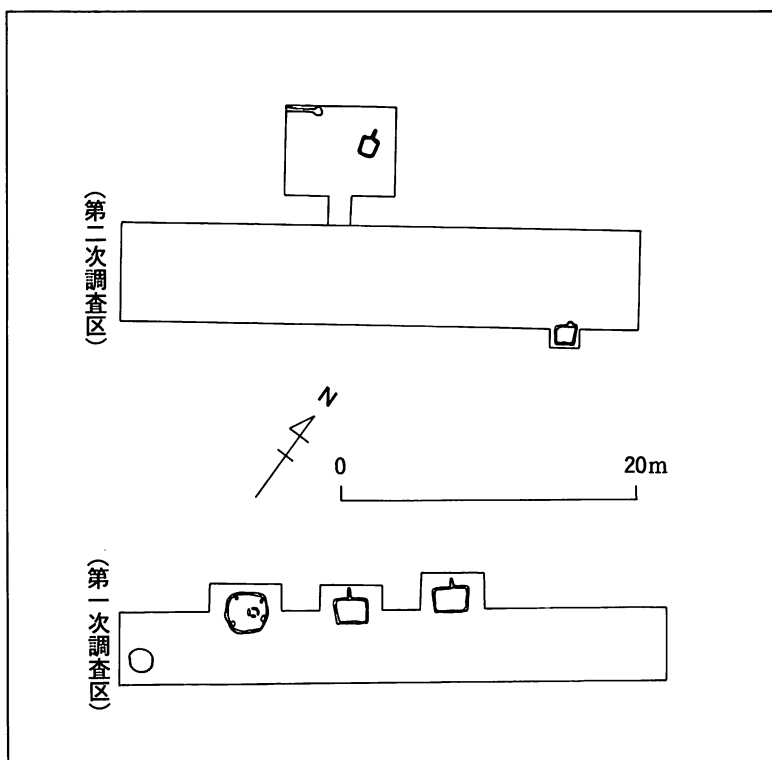
## まとめ

大月遺跡は桂川の南岸にある河岸段丘上に立地する遺跡群の中の一つである。ここでの調査は校舎改築予定地のみ限定される為、過去2回にわたる調査区とは連続せず、調査区との間は未発掘の空白部となり、さらに遺構の分布も極めて薄いものであった。

遺構の分布は第14図に見るように縄文時代では、1号住居址、2号址（床面らしき箇所と遺物集中区）が調査区の南端に認められる程度で、その分布は極めて希薄であるといえる。過去の調査例からは、現在の校庭部分が遺跡の中心をなすといわれており、調査区南端に検出された縄文期の住居址は、その集落の北端を構成するのかも知れないが、資料が乏しい現段階においては多くは語れないというのが現状である。遺物関係では、1号住居址から曾利期の一括遺物が検出されている。1号址は立て替えがなされたと言われており、現存する壁の内側に溝がそれに並行して存在する。この溝に伴うものとして、埋甕が認められる。これは1号址の一括遺物より先行するといわれるものであるが、その文様は地文条線に、平行沈線による連弧文、それ以下で縦帯区画文であり住居内出土の一括遺物とは変化が認められない。

1号址出土の一括遺物の特徴は、口縁では沈線による連弧文を有する例、粘土貼付による端部渦巻文と半円区画の組み合わせによる例とが認められ、さらに胴部では口縁部より垂下する波状の懸垂文、2連の渦巻文が施され、曾利Ⅲ期に並行するもので、関東多摩地域の影響を受ける例が認められた。

今回の調査では、遺構の確認には至らず、縄文関係の遺物は、遺構確認時におけるものが主であり、したがって一括で検出されたものではない。確認された土器片よりは、曾利Ⅳ式とみられる縦帯区画文、曾利Ⅴ式に特徴的な逆ハ字状列点文、微隆起線文、細条線文等が認められるが、量的には僅少であると



第14図 大月遺跡遺構配置図

いえる。後期ではさらに量は少なくなり、堀之内、加曾利B式が数点認められる程度である。

また歴史時代に至るとその数はやや増えるものの、2回に亘る調査で僅かに合計4軒が認められたのみであり、やはりその分布は希薄であるといえるが、検出位置が調査区の未確認地区寄りによる傾向を示し、この部分にも遺構の存在が期待できる。竈は北竈を有し、主軸の方向もほぼ同一方向を向き配置は整然としている。

今回の調査で発見された住居址は、いずれも隅丸方形を呈しており、規模は大型のもので4.4m×5m、小型のもので3m×3.4mの範囲に納まり、小規模なものであると言える。遺物は、第5号住より、甕、小型甕の1点づつが検出されたのみであり、やはり遺物量は僅少であるが、相模型甕が確認された。本遺跡と時間的に近い例は、近隣の遺跡を含めても数例と意外に少ないのが現状である。





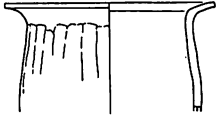
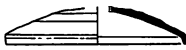
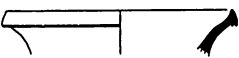
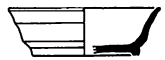


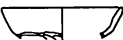

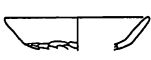
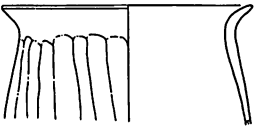
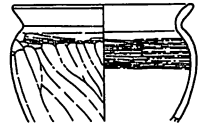

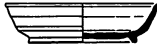

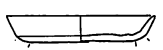

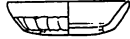

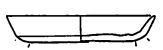

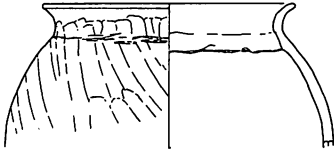
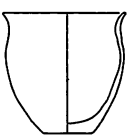
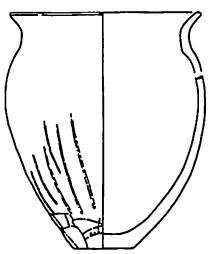
大月遺跡の第I期は、4号住居址が該当して甲斐地域の奈良時代、平安時代土器編年（山梨県）の第I期に位置する。

須恵器は蓋、高台坏、坏が認められる。蓋は内面の返りをもたない擬宝珠つまみのものである。坏は底部全面がへら削りで丸底状の形態を有する。これに形態的、製作的にも近いものは、四ツ塚2号墳の墓前祭に用いられた須恵器・坏に類例が求められ、そこでは湖西窯に製作地が求められる。高台坏は底部が高台の接地線より下方に飛び出す。

土師器は坏、長胴甕が出土している。坏は器体部の下半に陵線の痕跡を残し、それより以下ではへら削りが施される。甕は胴部をへら削り後に丁寧な撫で整形が施され、実年代は、須恵器より8世紀第1四半期に求められている。

大月遺跡の第II期は、甲斐地域の奈良時代、平安時代土器編年（山梨県）の第III期に属し、本遺跡では第3号、5号が該当する。須恵器は蓋、高台坏、坏、甕は球胴甕、球胴と長胴との中間形が出土している。蓋は擬宝珠つまみで返りを持たない。高台坏は身が浅く扁平なものである。土師器は体部の下部にやはり陵線を残す盤状の坏が認められ、底部にはへら削りが多用される。甕は外面では縦位のへら削り後に撫で整形が施される。内面では僅かに体部の底部よりで刷毛調整が認められるが、丁寧な撫でにより整形される。本期は坏より相模型Ⅳ、Ⅴ期に、甕からは相模型Ⅴ、Ⅵ期に該当し、8世紀第3四半期にその年代が求められる。

以上が、大月遺跡の調査結果である。今回の調査では縄文で、従来の成果に中期後半の曾利Ⅲ式から後期にかけての土器片を足したのみで、歴史時代で、8世紀第3四半期の住居址とそれに伴う相模型の甕形土器を足したが、遺跡の中に校舎2棟分のトレンチを設置した恰好にすぎず遺跡の全容を知るうえには到底及ばず、ようやく調査の端緒に着いたばかりであるといっても過言ではない。今後、本遺跡の調査が進み遺跡解明、さらに古代山梨を考える際の一資料として活用されれば、本調査の目的は達成されたものと考えられる。

時期 遺跡	器種	蓋	坏	甕	
甲斐 I 期  (II 期)	大月遺跡第4号住		 	 	(1977年調査)
	中谷遺跡第1号住	 	  	    	
	大月遺跡第3号住		   	    	(1977年調査)
	大月遺跡第1号住			 	

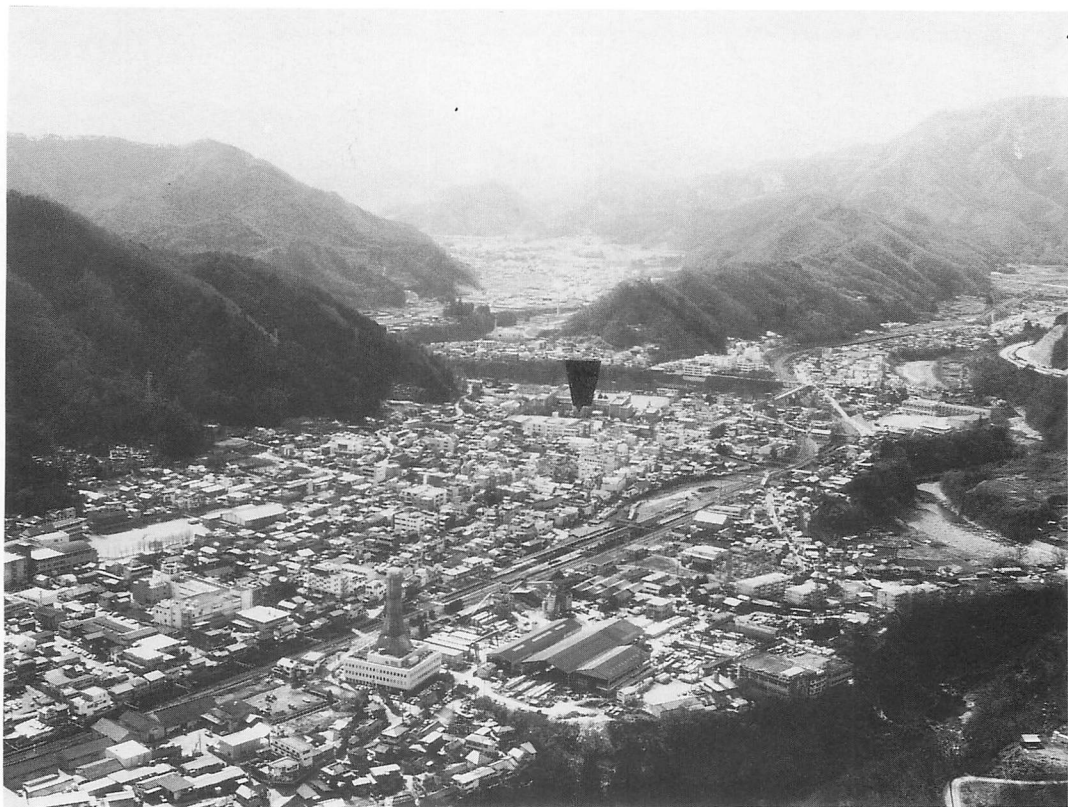
第15図 山梨東部地域土器変遷図

## 参考文献

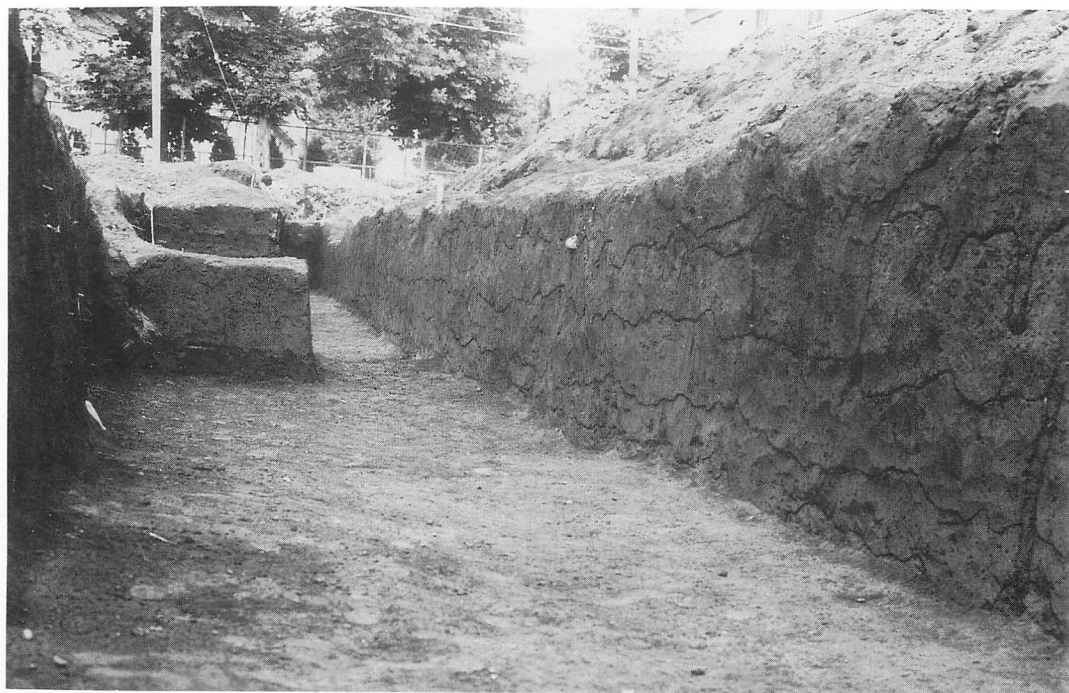
- |           |                     |          |       |
|-----------|---------------------|----------|-------|
| 大月市史編纂委員会 | 大月市 史料篇             | 大月市      | 1976年 |
| 坂本美夫他     | シンポジウム奈良・平安時代土器の諸問題 | 神奈川考古14号 | 1983年 |
| 山梨県教育委員会  | 大月遺跡 (I)            |          | 1977年 |
| 都留市教育委員会  | 堀之内遺跡発掘調査報告書        |          | 1980年 |
| 都留市教育委員会  | 中谷・宮脇遺跡             |          | 1981年 |

# 版 圖

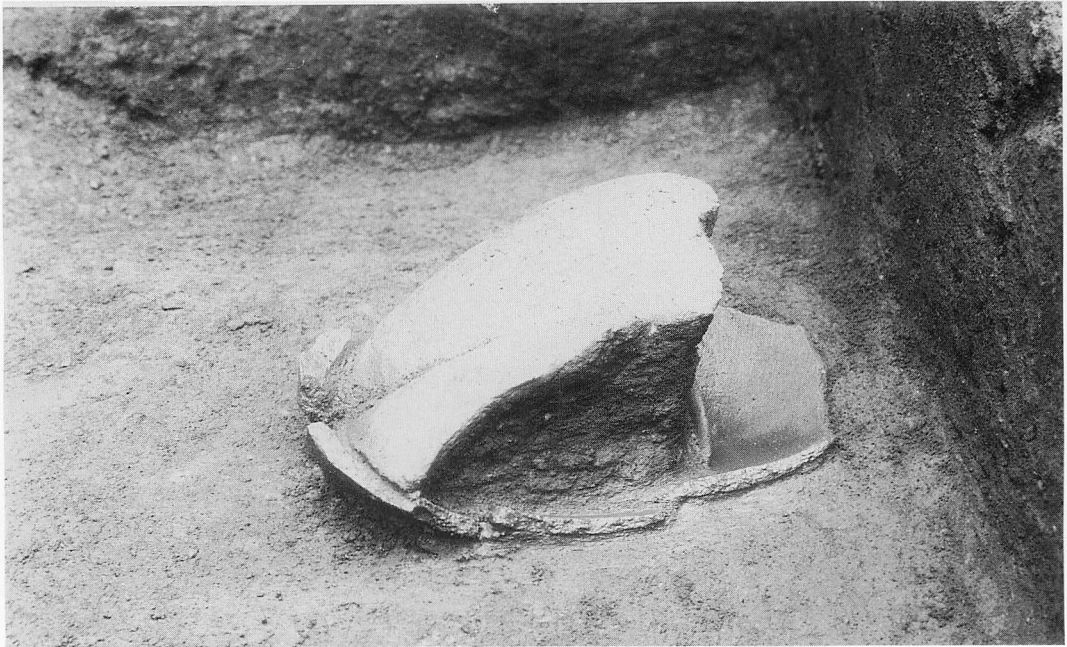




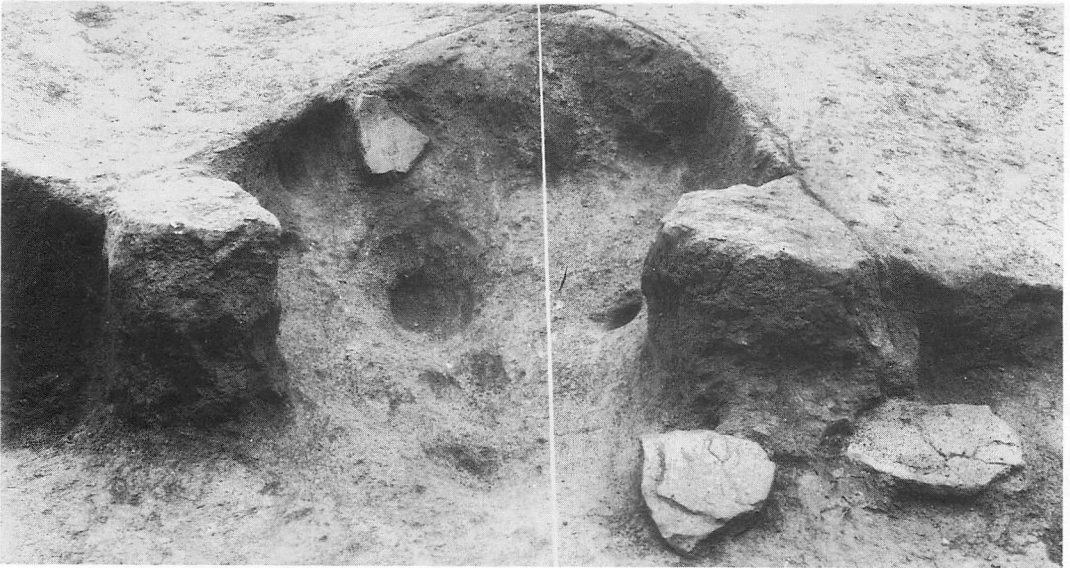
大月遺跡全影



土層



第1号住居址及び遺物出土状況

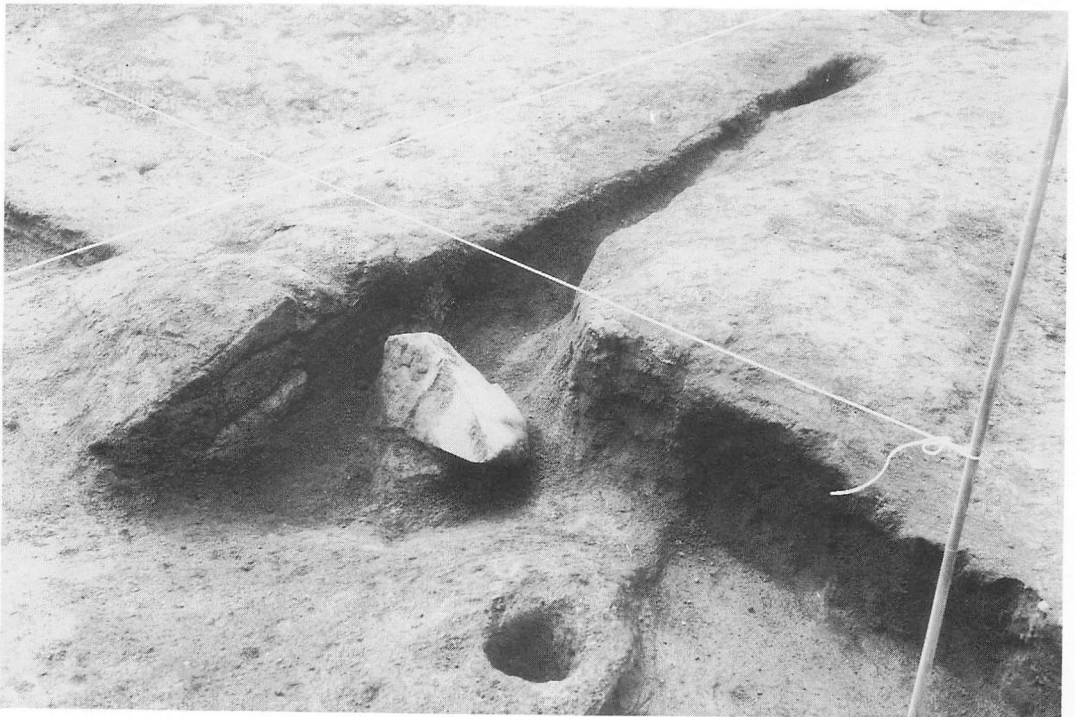
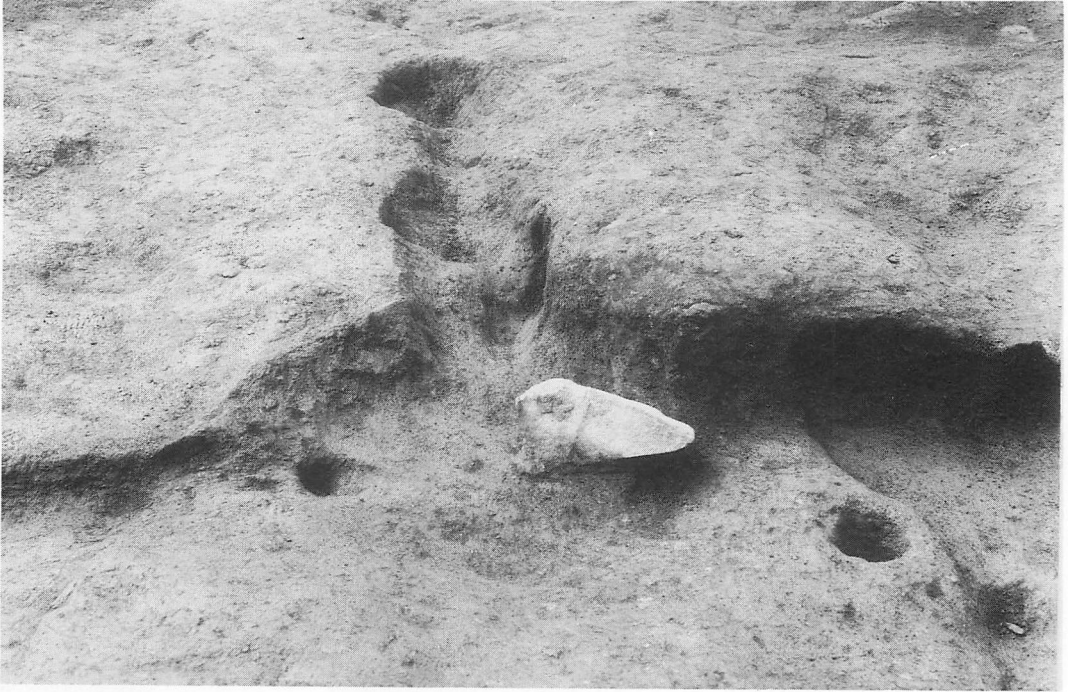


第1号住居址、竈





第2号住居址



第2号住居址、竈



出土遺物（奈良時代土器）



フリガナ	オオツキイセキニ	
書名	大月遺跡Ⅱ	
シリーズ	山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第67集	
主著者・従著者	小林広和、里村晃一	
発行者	山梨県教育委員会	
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター	
電話・住所	0552-66-3881 山梨県東八代郡中道町下曾根923	
印刷所	(株)少国民社	
概	主な時代	縄文中期・後期 奈良時代
	主な遺構	住居址2軒、溝1基、土壇1基
要	主な遺物	縄文時代 土器片1片 奈良時代 甕1点、小型甕1点
	調査期間	昭和52年7月18日～昭和52年8月8日

山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第67集

1992年3月25日 印刷

1992年3月30日 発行

大月遺跡Ⅱ

発行 山梨県教育委員会

印刷 株式会社 少国民社



